

北アルプス立山―槍縦走 P W

△期間▽ 八月十三日～十八日

△メンバー▽

P・L 大関 得一
 S・L 鶴田 栄己
 二年 飯田 成雄 平中 俊行
 一年 田中 均一 樋口 敏夫
 向井 孝彰 西井 竜吾

△企画と準備▽

薬師と黒部五郎を目標として、北アの良さを味わおうとした。準備段階においては、三年がなかなかついてくれなくて困った。

△予定コース▽

八月十三日 大阪―立山―室堂(バス)―雷鳥沢 TS
 十四日 TS―五色ヶ原 TS
 十五日 TS―薬師峠
 十六日 TS―黒部五郎―黒部五郎小屋前 TS

八月十七日 TS―双六池 TS

十八日 TS―中岳 TS

十九日 TS―大切戸―北穂―奥穂 TS

二十日 TS―上高地

なお、十八日～二十日は予備企画で、余裕があれば行くつもりであった。

△コースタイムと日誌▽

十三日 早朝立山一号で大阪駅を出発。立山からケーブルで美女平へ、美女平からバスで室堂に到着。室堂付近にサイト地が見つからず、小雨のふる中を雷鳥沢まで歩く。

十四日 晴

△コースタイム▽六時四十分出発―九時十五分一ノ越

雄山ピストン―十一時十分発―十五時三十分五色ヶ原

△日誌▽立山は予想通り美しい。竜王岳の登りでN君、空気が薄いとボヤク。実際、高度が高いせいかわ、ノドがひりひりし、頭痛も少しする。

十五日 晴

△コースタイム▽五時三十分出発―十時四十分スコ小屋―十六時三十五分薬師岳―十七時四十五分薬師峠 TS

△日誌▽五色ヶ原は、予想していたほど美しくない。しかし、出発してすぐに、雷鳥を二羽みかけたので、まずまずというところ。越中沢岳と鷲山の間のサイト地には、雪溪がとけてしまつて、水がなく、サイト不可。スゴ小屋あたりで早くもバテ気味で、薬師の登りで完全にまいり、北薬師の頂上付近で、アイスコヒーをつくつたりして日和る。一時間ほど休むと元気が出る。薬師岳のカールをみた時、非常に感動した。これほど堂々とした山は、かつて見たことがない。薬師の頂上からは、走って薬師峠まで下る。一時は、ここまで来ることができるか危ぶまれたが、何とかたどりつき、ほっとした。

十六日 雨

△コースタイム▽七時三十五分出発 — 九時三十分北ノ俣岳 — 十五時三十分黒部五郎小屋 T.S.

△日誌▽朝から雨が降っているし、我々も疲れているので、雲の平を通ろうかとも思ったが、少し天気が回復したので幸いに、天気図も見ないまま出発。念願の黒部五郎岳に着いた頃には、雨が本降りとなり、寒さにふるえながら、あわてて下る。小屋まで予想以上に遠く、M君のキャラバンがいかれたこともあって、心配する。やっと小屋に着き、テントを立て、飯を炊き始めたと思つたら、パトロール員がやってきて、違反テントだからすぐ移せと、きつく注意する。泣きたい思

いで、雨の降る中を、テントを移す。今日は全くついてない。

十七日 晴

△コースタイム▽九時十五分出発 — 十一時二十分三俣蓮華岳 — 十三時三十分双六池 T.S.

△日誌▽昨日、一昨日、と強行スケジュールが続いたため、全員ぐっすりと眠り、目をさましたのは、何と八時すぎであった。しかし、黒部五郎小屋まで足をのびしていたので、十分にまにあつた。三俣蓮華の上から、下をみおろすと、黄色いユニフォームがみえる。裏銀縦走のパーティーである。共に予定通りコースを消化してきた事を喜ぶ。夜のミーティングで、奥穂まで行くかどうか問題となる。ガソリンが不足しているし、地下タビばきの者もいる（キャラバンがいかれたため）ので、行けるかどうか不安である。

十八日 くもり

△コースタイム▽五時三十分出発 — 十時槍ヶ岳 — 五時徳沢園 T.S.

△日誌▽奥穂へ行かないと決定。このような山行の場合、ガソリンは一日一人百cc必要であるとわかる。槍ヶ岳で裏銀パーティーと別れ、槍沢をひたすら下る。徳沢園に着くと即解散して、ビールで乾杯。

△反省▽

山でガソリンが不足するという事は、どれほど心細いものであるか痛感した。

(平中記)

立山槍縦走

樋口敏夫

立山に向うバスの中で、僕は正直のところ多少不安があったことは否定できない。生まれて初めてのアルプスだし天候に關しても心配であった。バスの外に深くたちこめた濃霧が、そういう思いをいやがおうにも助長するのであった。しかし、濃霧の切れ間から、立山の雄大な雪溪が見えた時、なぜか心を隔らさずにはいられなかった。翌朝起きてみると昨日とはうってかわって快晴、これから本番である。ところがである。張り切って出発したもののどりも、いつもの山とは違うのである。頭が重いし動悸はするし、慎重に検討した結果、高山病ではないかと判断する。しかし、ここは日頃のトレの精神で克服する。ここ立山は、じいちゃんばあちゃん、それに背広を着たにいちゃんが出て少し幻滅させられた。翌日、この山行で一番充実した行程である。あのとてつもなくでかい薬師岳を登るのは、何んと表現しならよいか、その苦しさは三次トレ以上のもの、と言っても過言ではない、と僕だ

けが思った。そして、悪戦苦闘して薬師岳の頂上を踏んだのは、もう四時過ぎ。それから走って下って、この日のサイトに着いたのは六時過ぎ。この日は、行動時間十二時間半というPW史上最高記録ではないか、という噂が乱れとんだ。翌日、昨日とうって変わって、不穏な雲の動きを気にしながら黒部五郎岳を登った。あいにく雨が降ってきて、さえない日であった。翌日、この日、三俣蓮華岳で写真を写そうとすると、下の道に、黄色いユニホームをした何やら不可解な集団がいるではないか。大声で呼びあつて、この集団が後立山PWの連中であることが判明した。地球は広いようで狭い。ここからフリーワンデリングとなつて、双六小屋まで走っていくやつもいれば、昼寝をして行く者もいた。翌日、念願の槍ヶ岳に向う。あの険しくも美しい槍の姿が歩くごとにだんだん近づいてくる。最後の登りは、ガレ場の急登でようやく小屋につく。いざ槍がこんなに近くになると、何故か槍の美しさというものはなく、ただ巨岩の塊としか言えない。一漾、槍の頂上に登ると、今までたどってきた山々がはるか彼方に見え感慨無量、一同無念の涙はうそ。槍から穂高に行く予定であったが、あいにく天候が悪化し、装備の点で不備が生じた為、横尾に下山した。あゝ、穂高よさらば。あんなに近くに見えながら、無念の涙をのんだ。しかし、実際、アルプスはさすが山の美しさの点で筆舌に尽し難い。上高地へ帰る途中、来年もまたやってくる、と心に誓うのであった。